

第14号

奈良 国立博物館 だより

平成7年 7・8・9月



共催展「春日大社名宝展」

6月27日(火)～7月30日(日)

新館

主催：奈良国立博物館、春日大社

後援：読売新聞大阪本社、読売テレビ

特別展「甦る正倉院宝物 —復元模造にみる伝統美—」

8月19日(土)～9月24日(日)

新館

主催：宮内庁正倉院事務所、奈良国立博物館、
朝日新聞社

後援：日本工芸会、NHK奈良放送局

協力：東京国立博物館ほか

協賛：近畿日本鉄道

平常展「仏教美術の名品」

6月27日(火)～

本館

月曜日休館

午前9時～午後4時30分

(入館は4時まで)

〔写真説明〕

鹿島明神影向図（春日大社蔵） 南北朝時代（永徳3年＝1383）

春日第一殿の祭神である武甕槌命が常陸国の鹿島より二人の随神を従え、神鹿ののって御蓋山に影向する場面を描いたもの。上方に轡と大円鏡を描き、鏡中には春日大社の本地仏を表している。古い軸木銘により、永徳3年(1383)に南都絵所絵師二条英印によって描かれたことがわかる。

共催展「春日大社名宝展」

6月27日(火)～7月30日(日) 新館

春日大社は、平城京の東端、三笠山の山麓に社殿を構えるわが国有数の神社です。平城遷都(710)後まもなく、藤原氏は鹿島神宮、香取神社の両社を勧請し、これに祖神平岡神、比売神の二柱を加えた四神を御蓋(三笠)山の山頂に祭祀しました。その後、神護景雲二年(768)には山麓に社殿が整えられ、藤原氏の氏神として、同じく藤原氏の氏寺である興福寺とともに尊崇されました。とりわけ平安時代には、摂関家の春日詣はもとより、天皇・上皇・皇族の春日詣が盛んに行われて繁栄を極めるとともに、また中世には武士たちによって厚い信仰を受けました。そうした信仰の中で制作され、あるいは奉納された美術は、優雅な王朝美術をよく伝えています。

今回の特別展は、折しも本年行われる二十年に一度の式年造替にあわせて開催するもので、春日大社に伝来した名宝の数々を、関連優れた文化財とともに一堂に集めて展示するものです。

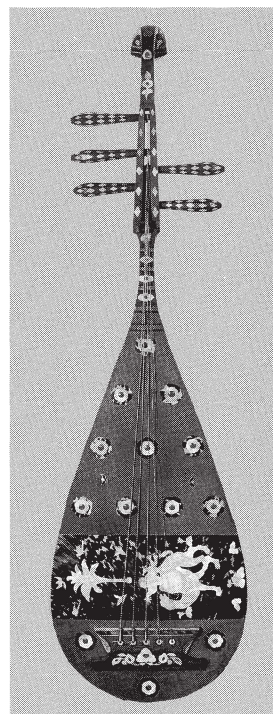


●本宮御料古神宝のうち蒔絵筆(部分)

特別展「甦る正倉院宝物—復元模造にみる伝統美—」

8月19日(土)～9月24日(日) 新館

正倉院宝物は、わが国が世界に誇る奈良時代の文化財であり、その華麗な宝物は毎秋の「正倉院展」において常に人々を魅了しています。こうした宝物は、とくに明治時代の殖産興業政策にもなう工芸振興の流れのなかで、その技術の調査・研究が行われ、帝室技芸員らの優れた伝統工芸作家によって修復や模造制作が進められてきました。また優れた宝物は、工芸作家の創作意欲をかき立て、模作をとおして正倉院宝物への技術挑戦が続けられました。一方、近年には、正倉院事務所によって科学的調査を加味した宝物の精査が続けられ、その成果に基づいて当初の宝物の姿を再現する復元模造も進められ、いわゆる人間国宝をはじめとする優れた工芸作家がこれら携わってきました。この特別展は、明治以来の宝物模造の中でもとくに優れた作品と、正倉院事務所による復元模造品を一堂に集め、わが国の優れた伝統工芸の一端を紹介しながら、作品をとおして住時の華麗な宝物の姿に迫ろうとするものです。



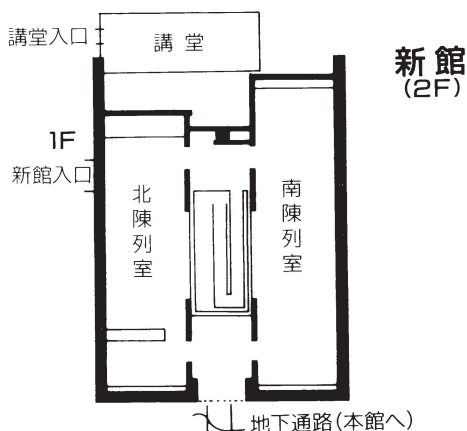
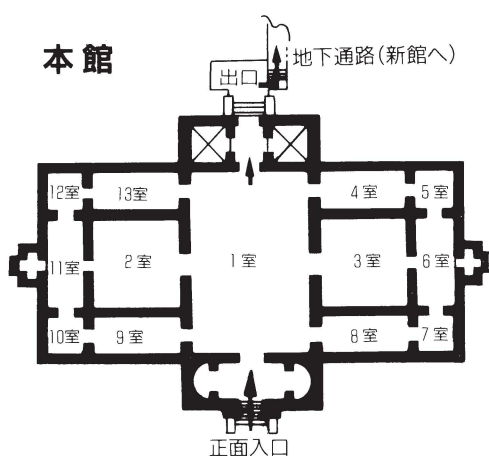
螺鈿紫檀五絃琵琶

平常展「仏教美術の名品」

6月27日(火)～

本館

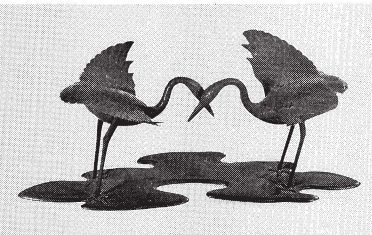
当館で収蔵・保管する館蔵品・寄託品の中から、国宝・重要文化財を含む多数の仏教関係の優品を展示し、仏教が伝来した飛鳥時代から連綿と続く多彩な美術を紹介します。本館は、各種の仏像の時代展示と、寺院出土の遺物や瓦などを展示。新館は、仏像・仏画を大乘仏教、密教など種類・主題別に展示するほか、経典や仏教関係の文書、仏堂の装飾や、仏の供養に用いるための様々な仏具を展示しています。



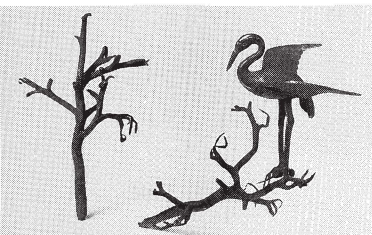
(ミュージアムショップは1階東側、ハイビジョンギャラリーは入口西側にあります)

主な展示品

	本館		新館			
	彫刻	考古	彫刻	絵画	書跡	工芸
七 月	6月27日(火)～ 1、2、9～13室 【飛鳥時代】◎銅造誕生釈迦仏像（正眼寺）、◎銅造弥勒菩薩半跏像（神野寺）【白鳳時代】◎銅造観音菩薩立像（金剛寺）、◎銅造誕生釈迦仏像（悟真寺）、●銅板法華説相図（長谷寺）、◎木造菩薩立像（金竜寺）【奈良時代】●乾漆十大弟子立像のうち舍利弗・目犍連像（興福寺）、●乾漆八部衆立像のうち緊那羅像（興福寺）、●木心乾漆義淵僧正坐像（岡寺）、◎木造十一面観音立像（薬師寺）【平安時代】◎木心乾漆阿閼如来坐像（西大寺）、◎木造十一面観音立像（地福寺）、●木造薬師如来立像（元興寺）、◎木造如意輪観音坐像（当館）、◎木造千手観音立像（園城寺）、◎木造十一面観音立像（勝林寺）、◎木造日羅立像（橘寺）、●木造薬師如来坐像（当館）、◎木造十一面観音立像（海住山寺）、◎木造弥勒仏坐像（東大寺）、◎木造十二神将立像（東大寺）、●木造板彫十二神将像（興福寺）、木造阿弥陀如来坐像（東大寺）【鎌倉時代】●木造法相六祖坐像のうち行賀像（興福寺）、◎木造多聞天立像（当館）、◎木造広目天立像（興福寺）、木造弥勒菩薩像（林小路町）、◎木造地藏菩薩立像（東大寺）＜写真＞、◎木造地藏菩薩立像（長命寺）、◎木造愛染明王坐像（当館）、銅造不動明王立像（天ヶ瀬組）、◎木造千手観音立像（妙法院）、◎木造馬頭観音立像（浄瑠璃寺）、◎木造釈迦如来坐像（東大寺）、木造如意輪観音坐像（当館）、木造大黒天立像（当館）、木造四天王立像（霊山寺）、◎木造閻魔王倚像（金剛山寺）、◎木造聖徳太子立像（成福寺）、◎銅造蔵王権現立像（大峰山寺）、◎伎楽面（東大寺）、◎舞楽面（手向山神社）◎行道面（浄土寺）、◎木造化仏・飛天（興福寺）ほか	6月27日(火)～ 〔4室〕百濟出土古瓦、高句麗出土古瓦（当館）、平隆寺出土古瓦、新堂廃寺出土瓦（大阪府教育委員会）、向原寺出土古瓦（橿原考古学研究所附属博物館）、御所市上増出土古瓦、中宮寺出土古瓦（中宮寺）、巨勢寺出土古瓦、山田寺出土古瓦（奈良国立文化財研究所・橿原考古学研究所附属博物館）、善正寺出土古瓦、川原寺出土古瓦（奈良国立文化財研究所）、紀寺出土古瓦（当館）、南滋賀廃寺出土古瓦（個人・当館）、山村廃寺出土古瓦（当館）、慈光寺出土古瓦（火雷神社）、本薬師寺出土古瓦（当館）、河内寺出土古瓦（大阪府教育委員会）、大官大寺出土古瓦（奈良女子大・当館）、興福寺出土古瓦（当館）、平城宮跡出土古瓦（当館）、東大寺出土古瓦（当館）、唐招提寺出土古瓦（唐招提寺）、秋篠寺出土古瓦（秋篠寺）〔5室〕山村廃寺出土蓮華文鬼瓦、薬師寺出土鬼神文鬼瓦（京博）、◎大安寺出土鬼面文鬼瓦、中山瓦窯出土鬼面文鬼瓦、（当館）、秋篠寺出土鬼面文鬼瓦、和歌山・上野廃寺出土隅木蓋瓦（当館）、山田寺出土極先瓦（当館）、大阪・新堂廃寺出土極先瓦（大阪府教育委員会）、橿池廃寺出土極先瓦、〔6室東〕方形阿弥陀三尊埴仏（当館）、川原寺裏山出土方形三尊埴仏（明日香村）、橘寺出土火頭形三尊埴仏（当館）、三重・天花寺出土方形三尊埴仏（当館）、三重・夏見廃寺出土埴仏（当館）〔3室〕鳳凰埴（南法華寺）、川原寺裏山出土緑釉埴（明日香村）、◎元興寺五重塔鎮壇具（元興寺）、霊安寺塔跡鎮壇具（当館）、定林寺出土塑像菩薩像頭部（当館）、本薬師寺出土塑像頭部（薬師寺）、滋賀・雪野寺出土塑像断片、◎石製九輪附金銅風鐸（円証寺）、和歌山・上野廃寺出土金銅風鐸（当館）、●粟原寺伏鉢（談山神社）〔6室西〕◎佐井寺僧道楽墓誌及骨壺（当館）、◎山代忌寸真作及妻墓誌（当館）、行基舍利瓶断片（当館）、◎出雲荻村古墓出土品（当館）、◎青磁鉢附瓦製鉢（正暦寺）〔7室〕銅経筒（平治元年銘）、瑠璃鈕銅宝幢形経筒（当館）、瑠璃鈕銅板製経筒（当館）、銅経筒（当館）、飛鳥文陶製外筒（当館）、東京・松蓮寺経塚出土銅経筒（長寛元年銘）（当館）、同上銅経筒（永万元年銘）、同上銅経筒（建久4年銘）（当館）〔8室〕◎藤原道長願経（金峯神社）、◎和歌山・王子神社経塚出土紙本墨書法華経（王子神社）、福岡・飯盛山経塚出土瓦経（当館）、金銅水滴（当館）、銅合子（当館）、経塚出土鏡（当館）、青白磁合子・壺（当館）◎伝福岡県出土経塚遺物（当館）ほか				
						
八 月	7月31日(月)～8月18日(金) 陳列替のため休館					
	甦る正倉院宝物－復元模造にみる伝統美－ 8月19日(土)～9月24日(日) 螺鈿紫檀五絃琵琶、螺鈿紫檀阮咸、金銀平文琴、木画二十四絃箏（以上東京国立博物館）、螺鈿荘笠篋（正倉院）、刻彫尺八、牙横笛、紫檀金銀絵撥（以上東京国立博物館）、木画紫檀双六局（当館）、双六筒及び賽、墨絵弾弓、赤漆文櫨木厨子（以上東京国立博物館）、黒柿両面厨子（当館）、紫檀金銀絵挾軾（東京芸術大学）、木画紫檀小架（東京国立博物館）、黄金瑠璃鈿背十二稜鏡（奈良女子大学）、金銀平脱八稜鏡、銀平脱鏡箱（以上東京国立博物館）、杜家立成、紫檀金銀絵書几、天平筆、新羅墨（以上当館）、黒柿蘇芳染金銀山水絵箱、緑地彩絵箱、金銀絵籠箱、四重漆箱（以上東京国立博物館）、火舎（当館）、金銅合子（東京国立博物館）、子日目利簪・粉地彩絵倚几、子日手辛鋤・粉地彩絵倚几（以上当館）、金銀鈿荘唐太刀（東京国立博物館）、金銅鈿荘太刀、黄金荘太刀、金銀荘横刀、黒作横刀〔蔵手太刀〕（以上当館）、呉竹御杖刀（東京国立博物館）、白牙把烏犀三合鞘刀子、黒漆三合鞘刀子（以上当館）、黒漆十合鞘御刀子（東京国立博物館）、紫檀把黒漆二合鞘刀子、斑犀把白牙鞘金銅荘刀子、緑牙撥鏤把鞘金銅荘刀子、斑犀把紅牙撥鏤刀子、斑犀把烏犀鞘刀子、紫檀把牟久木鞘金銅荘刀子（以上当館）、工匠具〔包丁・鉈〕（以上東京国立博物館）、伎楽人形＜酔胡王・迦楼羅・呉女＞（以上当館）、袈裟箱袋、白絶、琵琶袋、天平宝物筆、白橡綾錦几褥、甘竹簫、雑帶、漆挾紙、紅牙撥鏤尺、紅牙撥鏤撥、白檀八角箱、粉地彩絵八角几、漆彩絵花形皿、紫檀木画箱、蘇芳地金銀絵箱、紺玉帶、螺鈿箱、螺鈿箱囀、花鳥背八角鏡、銀平脱合子、二彩鉢、磁鼓（以上正倉院）					
九 月	7月31日(月)～8月18日(金) 陳列替のため休館					
	9月25日(月)～ 陳列替のため休館					



◎若宮御料古神宝のうち銀鶴



◎若宮御料古神宝のうち銀樹枝・金鶴



伎楽人形＜呉女＞

奈良国立博物館開館百年（三）

昭和22年5月3日、新憲法が發布された日に、奈良帝室博物館は宮内省の管理から文部省所管の博物館となり、国立博物館奈良分館として発足することとなった。これにともない、従来奈良帝室博物館に置かれていた正倉院掛は、宮内府所管の正倉院管理署となり、博物館とは別組織となった。したがってこの秋行われた第2回正倉院展が、現行と同じ両機関協力しての開催の始めである。

文部省の所管となった博物館は、この機会に保存と展示を一体化する機構改革と組織の拡充がはかられた。さらに昭和24年1月26日の早朝に起こった法隆寺金堂の失火は、文化財保護施策の抜本的改革を促す契機となり、昭和25年には新たに文化財保護法が制定され、文化財保護に関する行政の体制も全面的に改革された。文部省の外局に文化財保護委員会が新設され、当館もその付属機関となり、昭和27年7月には東京国立博物館の分館から独立して奈良国立博物館となった。当時の展示は、東博の傘下を離れたために、館藏品がほとんどなく、南都の社寺を中心とする優品の寄託に頼ったものであった。

しかし、昭和30年代になると、こうした展示にも大きな転換期がもたらされる。当時の文化財の保管状況が、明治以来の博物館に寄託・保管する方法から、国が各社寺の収蔵庫の建設を援助し、現地で管理する方法に徐々に向かい、寄託者である有力寺院から文化財の返還が相次いで申し込まれたのである。興福寺の阿修羅像や仏頭、秋篠寺の伎芸天が相前後して返還されたのはその一例である。

こうした中で、当館は従来の名品展示から、仏教美術の鑑賞と研究に資するために、仏像・絵画・工芸などの各分野にわたって時代の変遷順にわかりやすく、しかも系統別に展示する新たな構想を示した。その指針は特別展「仏教美術の入門展」で示されるとともに、平常展「仏教美術の入門」に踏襲され、その方向は基本的に今日まで継承されている。

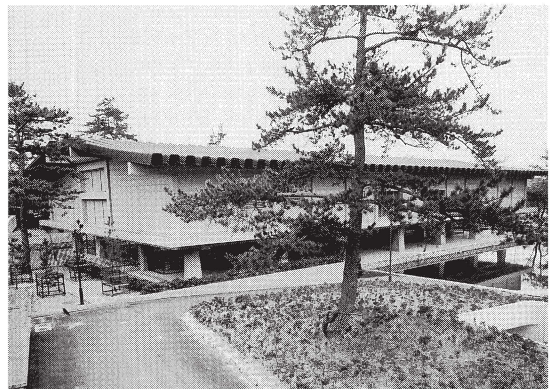
昭和43年6月15日に文化庁が発足し、これにともなって文化財保護委員会は廃止され、当館は文化庁の施設等機関として活動することとなった。そして、昭和47年3月には、昭和29年度以降永年にわたって要望してきた昭和新館が竣工し、待望の陳列館新館が実現した。基本設計は、東京芸術大学教授吉村順三氏で、建面積1,620平方メートル、延面積5,856平方メートル。空気調和施設を完備し、最新式の展示ケースを設けた近代的設備を備えたものである。また、昭和49年から53年にかけて、本館に空調設備等を設けるための改修工事が行われた。そして、両館を使つての平常展では、「仏教美術の大観」のテーマのもとに、各部門が総合して釈迦・大乘仏教・浄土

教・密教・禅宗・垂迹に区分し展示が行われた。さらに昭和53年には両館の開館と改修工事完了を記念して、特別展「日本仏教美術の源流」展が開催された。

また、昭和54年から56年にかけては、本館と新館をつなぐ地下連絡路の工事が竣工、通路の片面68メートルに陳列窓が設けられて、仏像の見方・制作技法等を示す各種の写真パネルや模型が制作・展示されてオリエンテーションに活用されている。

昭和55年には、20年以上親しまれていた釈迦・大乘仏教・浄土教・密教・禅宗・垂迹の各関係文化財に区分・構成されていた平常展を見直し、分野ごとの展示を優先して、本館では「仏像の変遷と技法」(彫刻)、「出土した古代仏教の遺品」(考古)、新館では「仏像・仏画の世界」(彫刻・絵画)、「仏の荘厳と供養」(工芸)、「仏典・墨跡・文書の世界」(書跡)のテーマにまとめられた。

こうして平常展における今日の展示構成が確立したが、現在建設中の第二新館が開館する際には、また新たな展示構想のもとで、リニューアルした「開かれた親しみやすい」奈良国立博物館の姿を見て頂けるはずである。



竣工当時の新館（昭和新館）

最後に、仏教美術資料研究センターについて触れておきたい。新館の東側に位置する建物は、旧奈良県物産陳列場（明治35年3月完成。関野貞設計）で昭和58年に当館の付属施設として所属替えを受け、重要文化財に指定、同59年より保存修理工事と改修工事が行われて、同63年にセンター庁舎として竣工した。仏教美術に関する調査研究資料の作成・収集・整備・保管と、関係する図書・模写・模本・拓本及び写真の公開を主目的としており、現在も継続して内容の充実が図られている。（現在、毎水・金曜日に開館）（終）

公開講座 特別展「甦る正倉院宝物―復元模造にみる伝統美―」

8月26日(土)	匠たちの言いのこしたこと	奈良学研究者	青山 茂
9月2日(土)	正倉院事務所における復元模造	宮内庁正倉院事務所保存課長	木村 法光
9月9日(土)	漆彩絵花形皿の模造について	重要無形文化財保持者	塩多慶四郎
9月16日(土)	近代工芸の中の正倉院宝物模造	普及室長	関根 俊一

午後1時30分より、講堂で開催。午後1時開場、先着120名。聴講無料。

ギャラリートーク

7月12日(水)	春日権現験記絵	学芸課長	河原 由雄
8月9日(水)	古代の墳墓	主任研究官	前島 己基
9月13日(水)	甦る正倉院宝物	工芸室長	阪田 宗彦

午後2時より、陳列室で開催。入館者は自由に聴講できます。原則的に毎月第2水曜日に開催。

親と子の文化財教室

平成7年度〈平安時代の歴史と美術〉	主催・当館	後援・奈良県教育委員会
7月8日(土)「マンダラの世界」		美術室長 梶谷 亮治
8月5日(土)「ふしぎな姿の仏像たち―密教の仏像(東寺)」		仏教美術研究室長 松浦 正昭
9月9日(土)「平安時代の工芸品」		工芸室長 阪田 宗彦

〈対象〉小学5・6年生、中学生および保護者等。児童・生徒のみの参加及び定員に余裕のある場合は高校生の参加も可。

〈時間〉午前10時から12時。

〈場所〉当館講堂・展示室ほか(現地見学もあります)。

〈定員〉50名(先着順)。

〈参加費〉無料(入館料とも)。

ただし見学料金が必要な場合があります。

〈申込方法〉往復はがき(または電話)で、住所・氏名・学校名・学年・電話番号・同伴する保護者等の氏名・実施日とを記入のうえ、〒630 奈良市登大路町50 奈良国立博物館 親と子の文化財教室係 ☎0742-22-7771までお申し込み下さい。



ハイビジョンギャラリー(新館1階ロビー)

ハイビジョンによる臨場感あふれるクリアーな映像と、わかりやすい解説で文化財の紹介をしています。現在、「奈良国立博物館の名品」を、彫刻・絵画・工芸・考古・書跡の各分野で製作を進めており、順次放映してゆく予定です。

八窓庵茶室の公開

〈公開日〉新館開館中の毎週木曜日(ただし雨天の場合は公開しません。)

〈公開時間〉午前10時より午後3時まで(入館者は自由に見学して頂けます。新館南側の扉よりお進み下さい。) 茶室の使用については、当館管理課までお問い合わせ下さい。

開館時間 午前9時より午後4時30分まで(入館は午後4時まで)

休館日 月曜日(月曜日が祝日または振替休日の場合は開館し、翌火曜日が休館)

観覧料金 毎月第2・4土曜日は、小・中学生無料(春日大社名宝展は平常展料金)。

特別展		大人	高・大生	小・中生
	一般	1,000	600	300
	団体	700	400	200

(団体は責任者が引率する20名以上。)

平常展		大人	高・大生	小・中生
	一般	400	130	70
	団体	200	70	40

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月の各1日に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し返信用封筒(80円切手貼付、宛名明記)を同封して、当館の普及室にお申し込み下さい。

〒630 奈良市登大路町50 電話0742-22-7771 FAX0742-26-7218 テレホンサービス0742-22-3331 奈良国立博物館